

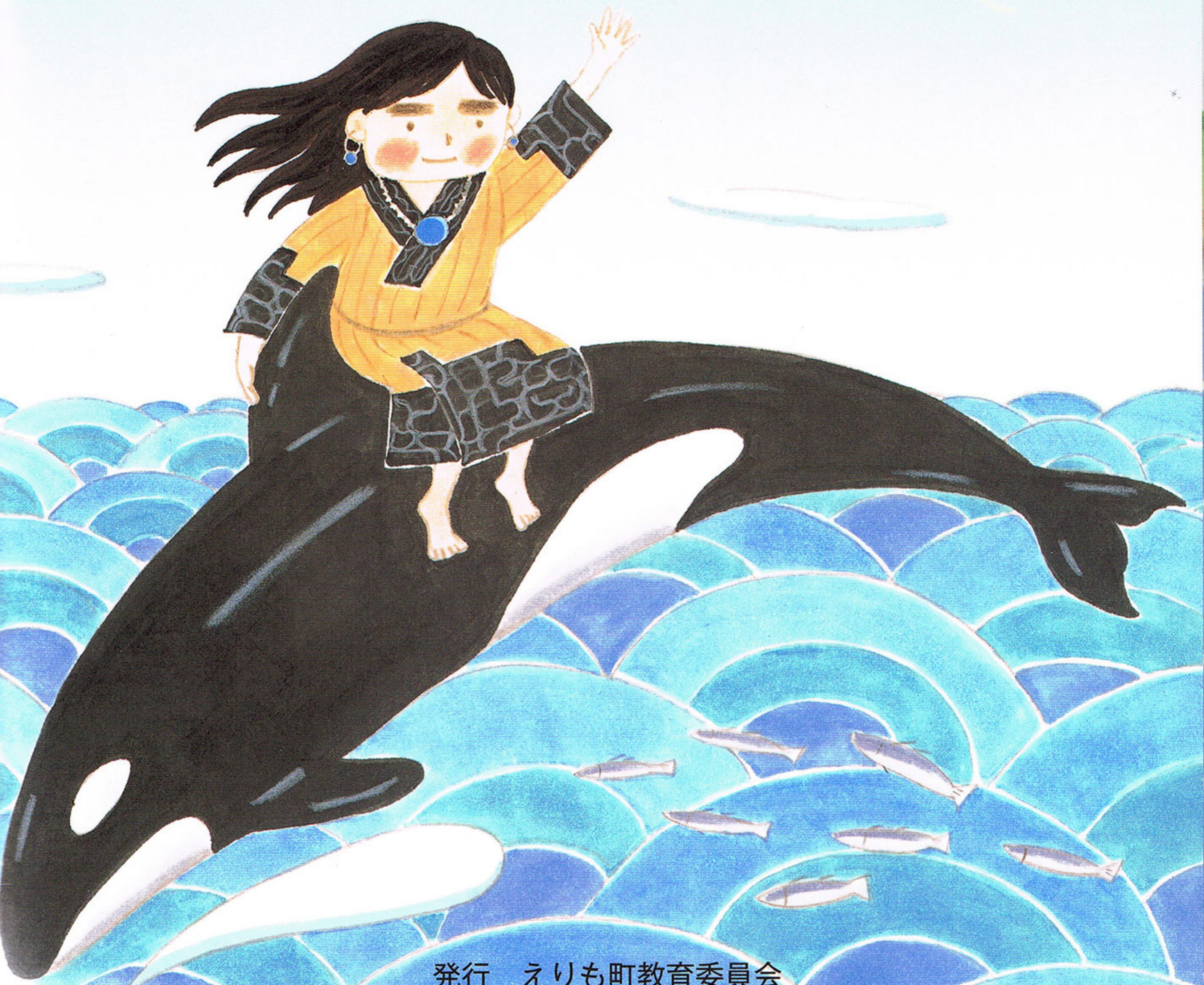
うみ

しょうじょ

海からきた少女

はな
ポロエンルムのお話し

え ぶん
絵と文 すずきもも



発行 えりも町教育委員会

ピリカノカ 襟裳岬（オンネエンルム）の絵本発刊によせて

えりも町教育委員会

「ピリカノカ」とは、アイヌ語で「美しい形」を意味し、北海道においてアイヌの物語や伝承、祈りの場、言語に彩られた優秀な景勝地のことです。

北海道内には指定地候補地を合わせて21ヶ所あり、「襟裳岬」は平成22年8月に国指定文化財名勝ピリカノカの一つとして指定されました。

襟裳岬の「えりも」は、オンネエンルムというアイヌ語が由来です。その意味は「大きな・突き出たところ」（大きな岬）です。「エンルム」を「エルム（ネズミ）」と考え、「おおきなネズミ」と解釈する説もあります。襟裳岬の地形や岩礁を見てネズミが飛び跳ねる姿を想像したのでしょう。

江戸時代、襟裳岬を訪れた旅人が多くの記録を残しています。その一部を紹介します。

- ・襟裳岬においてアイヌはカムイノミをする。（略）襟裳岬では弁財船の乗組員は神酒を捧げ、草で船を作り流すという（新井保恵「東行漫筆」1809）。
- ・エリモ岬ではアイヌはイナウを立てて神酒を供える（木村謙次「蝦夷日誌」1789）。
- ・モノク子（岩礁帯先端の岩礁）アキシ子イショウという、五つの岩ということ、実際に海中から五つ並んで出ていて、眺望は表現できないほどだ。ここにコンブが多く生えているが、アイヌなどはエリモさまのおひげだとして、昔から探ることはないと（松浦武四郎「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌」1858）。

これらの記述から、襟裳岬はアイヌ民族にとって聖地的な場所であることがわかります。

えりも町内の地名の多くはアイヌ語に由来しています。例えば、江戸時代の絵図や文書（松浦：前述）には、襟裳岬の岩礁名が「ポロソウ」「カパリソ」などが記載され、現在もそれぞれ「ぼろいそ」「かんばらいそ（かばらいそ）」と呼ばれ使われています。今の時代にもアイヌ文化は生きています。

アイヌの文化や自然観を表現したこの絵本をきっかけとして、より多くの人に先住民族であるアイヌの文化やアイヌ語地名などへの関心を高めていただき、皆さんと共に、アイヌ文化や伝統が継承されるよう取り組んでいきたいと考えています。

注）ボロエンルムは、幌泉の語源です。大きな岬のこと。襟裳岬の語源は、エンルム、オンネエンルムです。

この絵本に出てくるアイヌ語の解説

ボロエンルム=ボロー大きい エンルム=岬
フチ=おばあさん
エカシ=おじいさん
アヘカムイ=火の神さま

カムイ=神さま
ウォイ、ホーイ、オーアイ=女性の緊急時の叫び声
レフンカムイニシャチ（海の神さま）
フンボエー=くじら祭りの歌のかけ声

うみ しょうじょ 海からきた少女

はな ポロエンルムのお話し

え ぶん 絵と文 すずきもも



むかし、フチがはまべでこんぶをひろっていると
かいそうにまかれ、きれいな玉をもった
おんなこ 女の子をつけた。
フチは家につれていき、工カシにみせ、
ふたりはその女の子をそだてることにした。

もっていた玉をのぞきこむと、
あおい海のそこのような色がみえる。
フチはこれはおまもりだねといい、
その玉で首かざりをつくり 女の子の
きもののうちがわに いれてやった。



まずしかったけれど フチとエカシは
たいそうこの女の子をかわいがり
女の子はフチとエカシにまもられて
こころゆたかに そだつていった。

はるからなつ フチは女の子をつれて
はまべでは こんぶやかいをとり
山にはいって さんさいなどをつんだ。
エカシは海でさかなをとった。
フチもエカシも 神さまにいのりをささげ
かんしゃしてくらしていた。



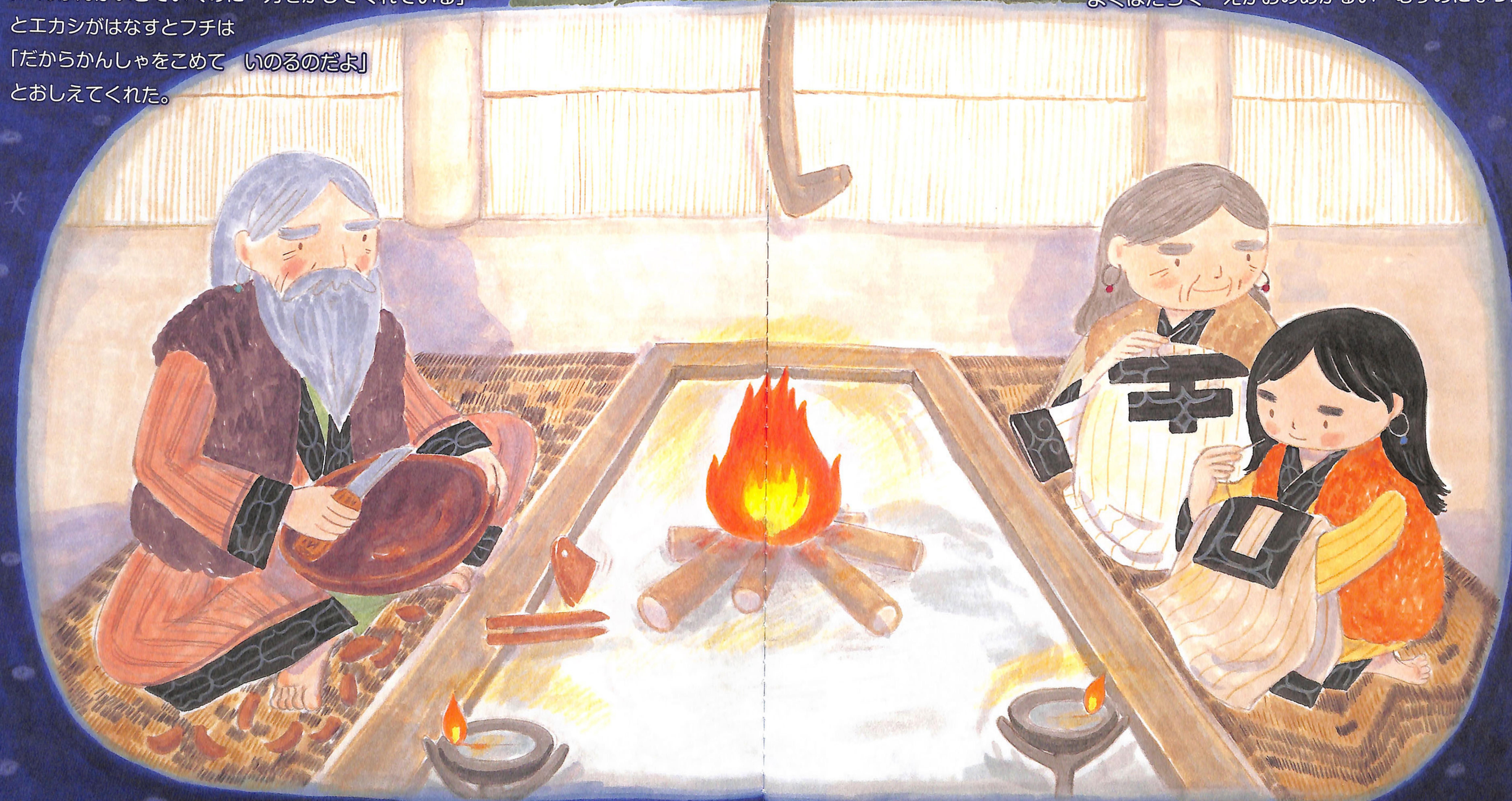
あきになると ふゆのしたくもはじまり
エカシは川でサケをとり シカをとってきた。
フチと女の子は山で くるみやどんぐりなど
木の実をひろったり
小さな畠でそだてたアワやヒエを しゅうかくした。
そして たべものをじょうずにほぞんして
ふゆのあいだ たいせつにたべた。



さんなん
三人のくらしはいつもしぜんとともにあり
おだやかに きせつのながれとともに くらしていた。

いえ
家のまんなかには「いろり」があり 「いろり」には
アペカムイという とくべつな火の神さまがいる。
神さまは山や海、いきもののはか 家のあちらこちらにいて
「にんげんがいきていくのに 力をかしてくれている」
と工カシがはなすとフチは
「だからかんしゃをこめて いのるのだよ」
とおしえてくれた。

おおゆきのひ フチはきものにししゅうを
エカシは木をけずって うつわなどをつくった。
ひとはりひとはり いのりをこめて
ひとけずりひとけずり いのりをこめて。
やがて女の子は大きくなり「レシラ」となすけられ
よくはたらく えがおのあかるい むすめになった。





ある年のこと。

おお
大あらしがおさまらず、

かぜ いちねんじゅう
つよい風が一年中ふきあれ ヒヨウや雨がつづき
やま はな
山は花もさかず 川や海があれてふねもだせない。

「カムイがおこっている」とエカシがいった。

ひとびと
人々はいつのまにか カムイにかんしゃすること

そしていのりをささげることを おろそかにしていたのだ。

たべものがつきてしまい

死んでしまう人が でてきた。

エカシとフチは とうとうこの地はけがれ、

カムイが さってしまったのだと ないと。



ふと気がつくと レシラのむねが光^{ひか}っている。
きもの中の首かざりの玉が 光^{ひか}っているのだ。

レシラは玉を取り出し 手のひらにのせると
光^{ひかり}が海^{うみ}をさしている。

レシラは光に みちびかれるように
ポロエンルムのさきに たっていた。

海のむこうからふきつける 大風^{おおかぜ}にむかって
レシラは海の神^{かみ}に いのった。
ウォーイ、ホーイ、オーイ。
ウォーイ、ホーイ、オーイ。

レシラはたかい声^{こえ}で 神さまによびかけた。
「神さま、どうかポロエンルムの人たちをたすけてください」





レシラは玉たまを海うみに なげいれた。

すると ふわりと風かぜにレシラのからだが
さらわれたかとおもうと あれくるうなみまに
大きなシャチ「海の神レプンカムイ」が あらわれた。
レプンカムイは そのからだのうえに レシラをうけとめ
やがて海のむこうに さってしまった。

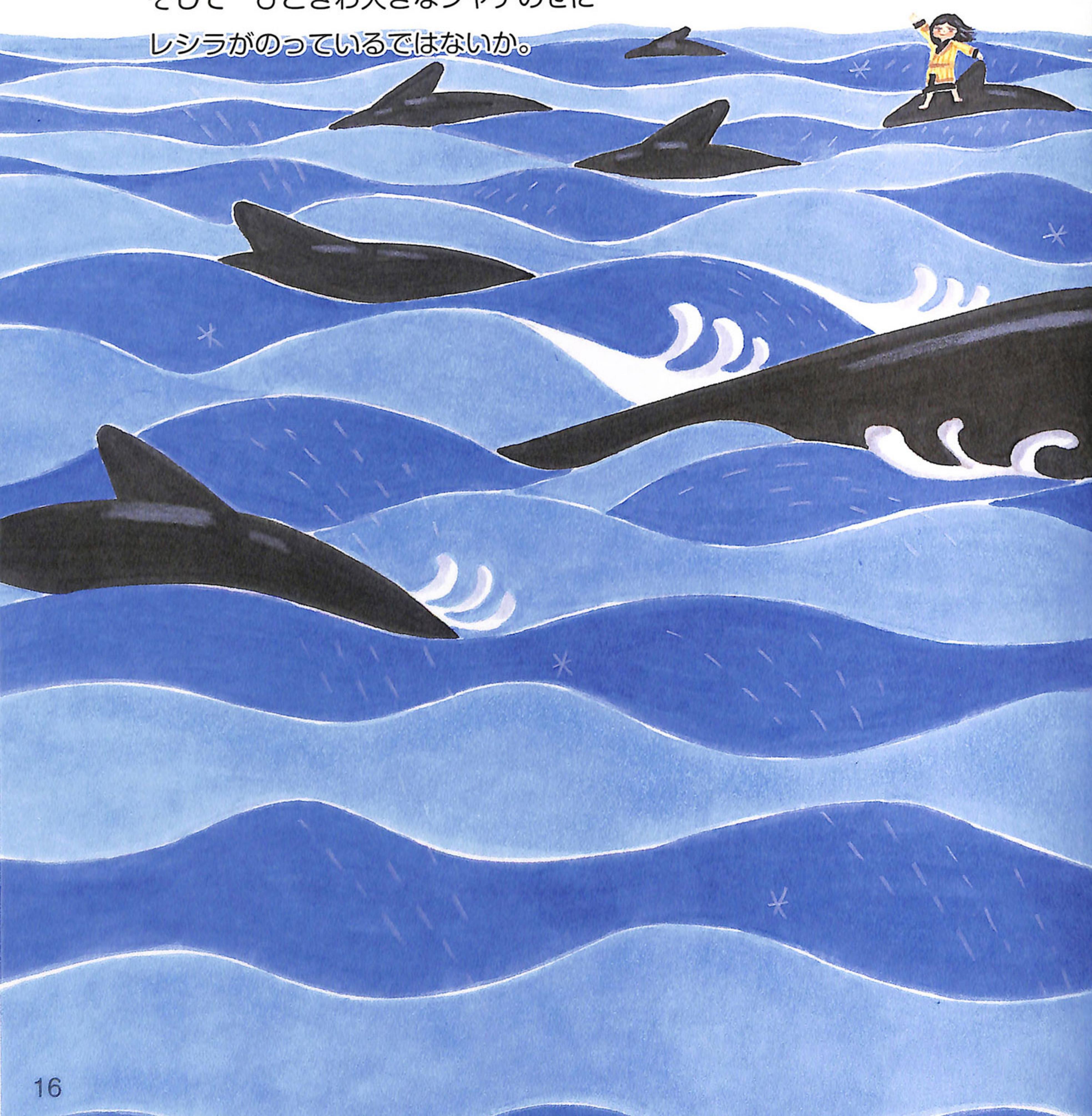
よくあさ 大あらしがおさまり
やわらかな光ひかりがさしている。

フチとエカシは ポロエンルムのさきっぽで
レシラがつけていた耳みみかざりを みつけた。
フチとエカシは 海をのぞきこみ
レシラのすがたを さがしたが
みつからず レシラをおもいかなしんだ。



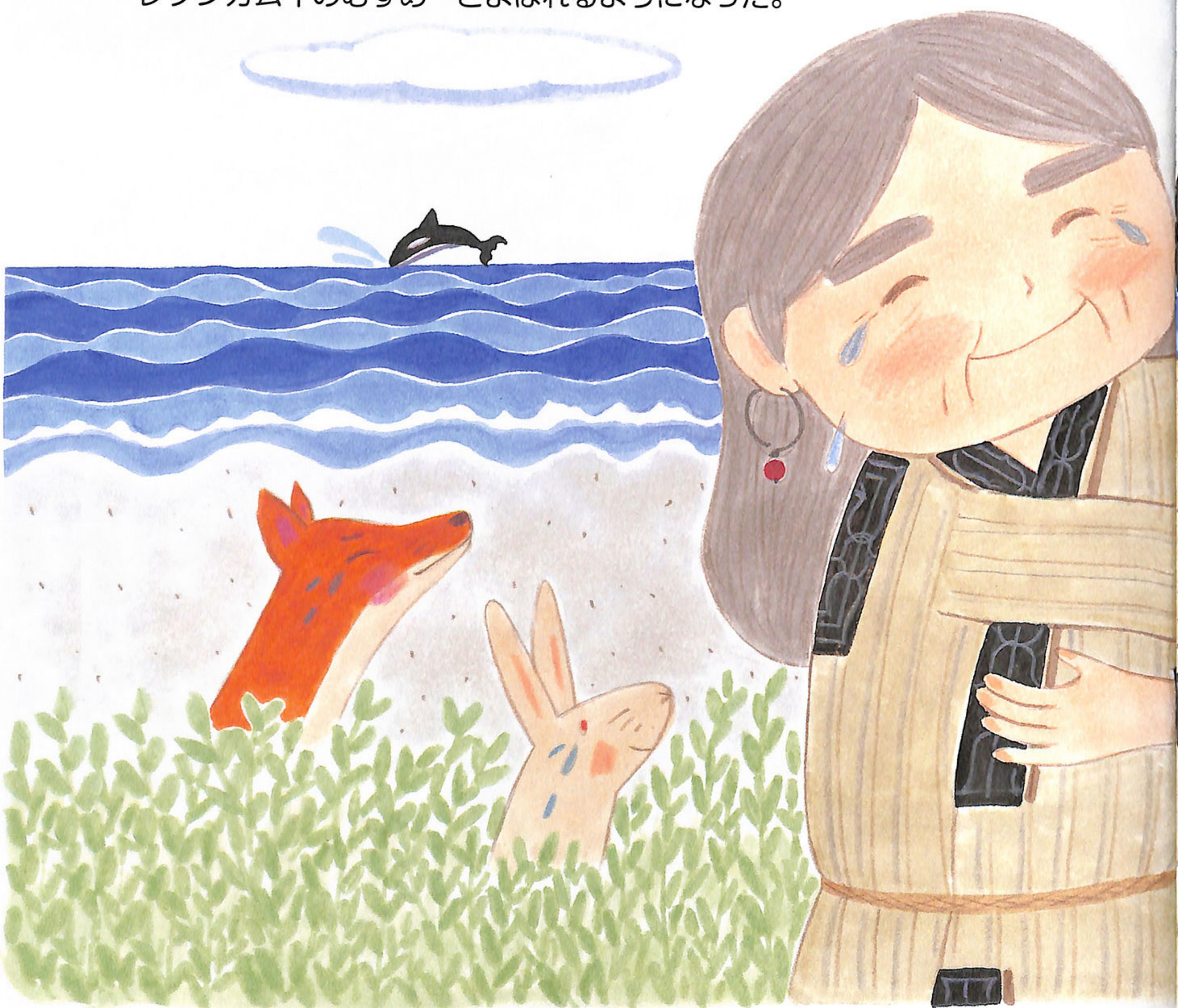
いくつぎがたったある日、
フチとエカシがいつものように
ポロエンルムの先から 海をみていると
沖から シャチのむれがやってくる。
大きなくじらをおっているのだ。

そして ひとりわ大きなシャチのせに
レシラがのっているではないか。

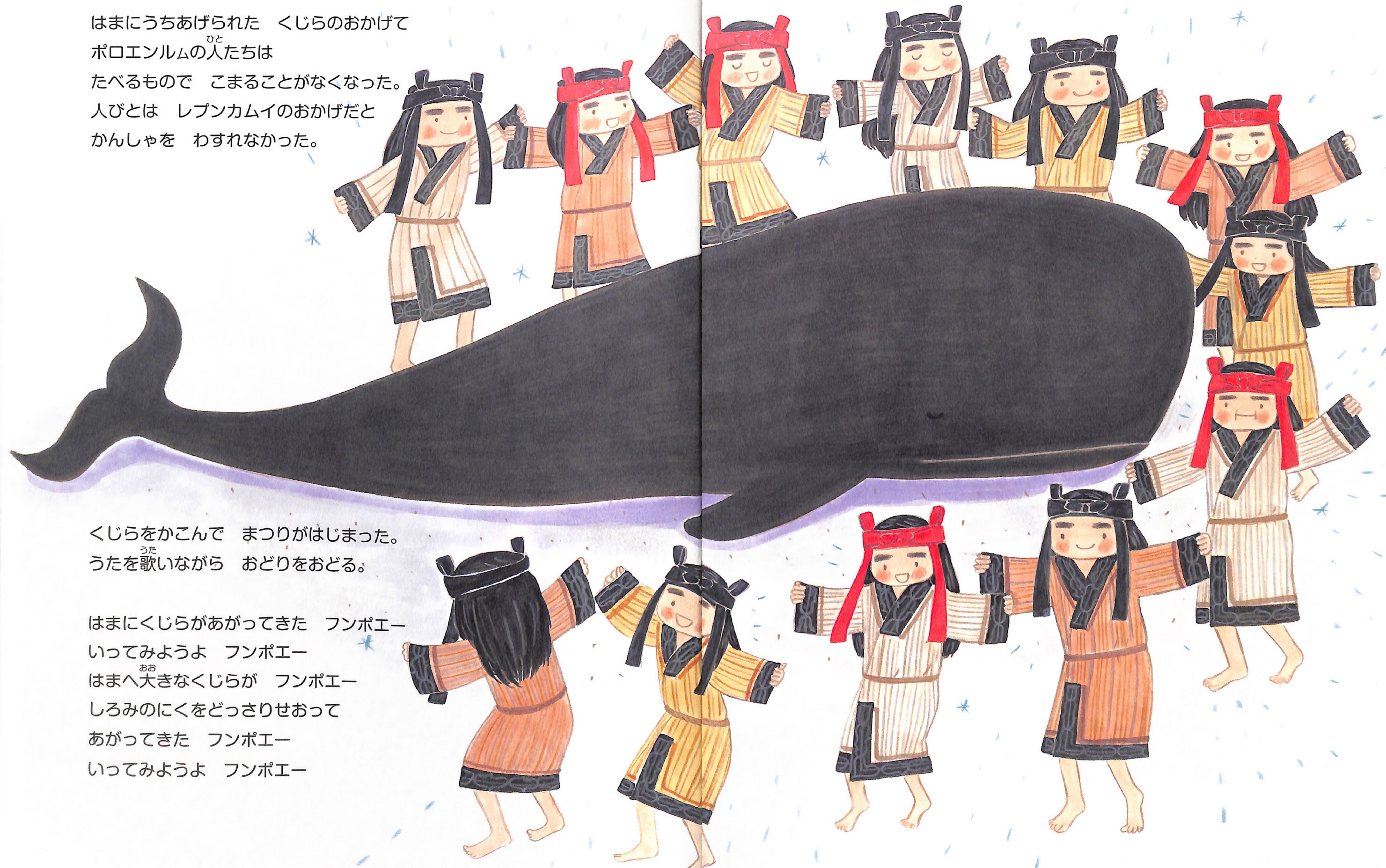


レシラを見つけた フチとエカシは
大きななみだをながして よろこんだ。
レシラがかえってきたのだ。
フチとエカシは レシラをかえしてくれた
海の神さまレプンカムイに
こころから かんしゃした。

いつしかレシラは ポロエンルムの人たちに
レプンカムイのむすめ とよばれるようになった。



はまにうちあげられた くじらのおかげで
ひと
ポロエンルムの人たちは
たべるもので こまることがなくなった。
人びとは レブンカムイのおかげだと
かんしゃを わすれなかつた。



くじらをかこんで まつりがはじまつた。
うたを歌いながら おどりをおどる。

はまにくじらがあがってきた フンポエー
いってみようよ フンポエー
はまへ大きなくじらが フンポエー
しろみのにくをどっさりせおって
あがってきた フンポエー
いってみようよ フンポエー

それからというもの　まいとし
おお
大きなくじらが　はまにうちあげられ
フチもエカシもレシラも　そして
ひと
ポロエンルムの人たちも
ずっとゆたかに　くらしたそうだ。

これはむかしむかしの^{はな}お話し



えりも町とアイヌ文化

様似町アイヌ生活相談員 大野徹人

アイヌ民族は北海道各地に暮らしていましたが、それぞれの地域にそれぞれの風土があり、それぞれの暮らしがありました。海の近くに住んでいる人たち、海から離れた内陸に住んでいる人たち、それぞれに食生活も違いますし、風習も違います。海に近い人々は海の魚をとって食べたり、クジラやアザラシなどの海獣も食料としていました。

現在のえりも町にも、先住民族であるアイヌ民族が代々暮らしてきました。残念ながら、えりものアイヌ民族の伝統的な暮らしについては記録が少ないですが、やはり海が近いだけに、海と密接な文化を持っていました。

「えりも」はアイヌ語のエンルムがもとになっていると言われていますが、このエンルムとはまさに「岬」を指す言葉です。その他、えりも町内に数々のアイヌ語地名が残されています。

江戸時代の記録によると、えりものアイヌ民族は、この絵本の舞台となっている襟裳岬をオンネ エンルムと呼んで信仰の対象にしていたことが分かっています。オンネとは「老いている」という意味ですが、「偉大である」というような意味もあります。また、襟裳岬には、ネズミの大将がいるという伝承が平取で記録されています。ネズミのことをエルムンもしくはエルムなどと呼び、音が似ています。そういったこともこの伝説と関係あるようです。

この絵本は、様似や平取のアイヌ民族に伝承されていた物語から着想を得て、創作された物語ですが、その中でシャチが大きな役割を果たします。

シャチのことをアイヌ語でレプンカムイといいます。レプンとは、「沖（海）にいる」という意味で、要するに「海の神」ということです。アイヌ民族にとってレプンカムイは非常に位の高い神様です。

シャチはクジラのような大きな海獣をも襲って食料にすることで知られていますが、人間を襲うことはめったにありません。むしろ、人間にとてシャチはありがたい神様なのです。というのも、シャチに追われたクジラが陸地に向かって逃げ、そのまま動けなくなってしまふこともあります。またシャチはクジラを狩って、肉の一部しか食べないことが多いのです。そのシャチの食べ残しのクジラが浜に上がることもあります。それも人間にとて大事な食料になります。そういったことで、アイヌ民族は、シャチは人間に食料を与えてくれる神様として大事にしたのです。

皆さんにもレシラの物語を読みながら、かつて海とともに生きていた、えりものアイヌ民族の先祖の生活に思いを馳せてもらえたたらと思います。



ヒ・ハ
カワシン・シユガイの
貝のカラを利用した
ヒエヤアワの
穂摘み具

あとがき＊この物語に寄せて

一昨年、えりも町教育委員会から、えりも町のアイヌ文化を絵本を通して伝えたいという、お話をいただいたところから、私のえりものアイヌ文化を探す旅が始まりました。

えりもを取材する中で、えりもが早くから和人に開かれた場所であり、それとともにアイヌの生活がちりじりになってしまった事を知りました。えりもにわずかに残るアイヌの方々の痕跡をたどり、えりも町の北海道アイヌ協会えりも支部の方々にご協力をいただき、話を聞きしたり衣装などの資料を見せていただいたりしました。そして、近隣の街に残るアイヌ文化、北海道に残るアイヌ文化の本や資料に目を通し、美しい襟裳岬、風の街えりも町、そこに生きたアイヌの方達の生活を想像して、ストーリーを考えていきました。様々な文献から、海の神様の話、鯨の話、様々な風習をつなげて、推敲を重ねて書き上げたのが「海からきた少女～ポロエンルムの話」です。

話は「鯨祭りの歌（フンポ・エー）」という歌（ウボボ）と「レブンカムイ（シャチの神）」のカムイユカラの、大きはこの2つからヒントを得て、創作しました。えりも町に暮らした大昔のアイヌの方々の姿は想像したものですが、アイヌ文化の持つ自然感を通して、現代に生きる私たちも、自然が与えてくれる恵みによって生かされているという事を、この絵本を通じて新ためて感じるきっかけになればいいなと思っています。

創作する上で本当にたくさんの方々にお世話になりました。なかでも様似町アイヌ生活相談員であり、アイヌ文化に詳しい大野徹人さんには、ほぼ最初から最後まで文章もさることながら、絵で表現する細部にわたり、アドバイスをいただきました。またえりも町担当者の中岡さんにもたくさんの手助けをいただき、このお二人がいなければでき上がらなかったかもしれません。また、印刷を手がけてくれた総北海さん、ぎりぎりの日程の中、丁寧な仕事をしてくださいました。本当にたくさんの方々にお世話になり、この絵本が出来上りました。この場をかりて、皆様に感謝申し上げます。

絵を描き、資料を見続ける中で、えりものアイヌ文化を探す旅は、いつの間にか先人たちが大切にしてきた「生きる知恵を学ぶもの」に変わっていきました。アイヌ文化は私たち現代人が失ってしまった、自然とともに生きることへの気づきを与えてくれているように感じています。そして、それは今風に言うならばエコロジーでコスモロジーな世界なのだと思います。絵を描き終えた今、まだまだこの興味は尽きなく、いましばらく旅を続けようと思っています。

すずきもも

著者紹介／すずきもも

イラストレーター、作家。東京生まれ、北海道夕張市育ち。
広告やパッケージなどのイラストやデザインをはじめ、街案内の本や絵本などを手がける。
「のんびり、にこにこ、ささやかに、シンプルに」がモットー。HP/http://momo-s.com

近著に「パン好きの毎日」（ソフトバンククリエイティブ）、

「みんな大好きさっぽろのパン屋さん」（北海道新聞社）

「えりも砂漠を昆布の森」（絵本塾出版）

「シャガールおじさんとねこのビビ」（北海道近代美術館／北海道新聞社）

参考文献／

- 「知里真志保のアイヌ文学」
- 「萱野茂のアイヌ神話集成 カムイユカラ編II」
- 「火の神の懷にて」（松居友著 小田イト語り）
- 「アイヌの美ーカムイと想像する世界」
(財団法人アイヌ文化振興・文化振興機構)
- 「北の民 アイヌの世界」(財団法人アイヌ文化振興・文化振興機構)
- 「えりも町史」など 他多数

発行日 2014年3月13日
発 行 えりも町教育委員会

〒058-0204
北海道幌泉郡えりも町
字本町 357番地
TEL/01466-2-2526

協 力 大野徹人
印 刷 (株) 総北海

無断で本書の転載、複写、複製することは禁じられています。
なお、お問い合わせは えりも町教育委員会にお願いいたします。

©Momo Suzuki 2014 Printed in Japan

